佛立信心のしおり

本　門　佛　立　宗

目次

入信を随喜して一言……2
1 お給仕……4
2 回向……6
3 口唱……8
4 懺悔……12
5 謗法……14
6 祈願……16
7 御法門……18
8 お寺参詣……20
9 お講……22
10 ご有志……24

はしがき

この小冊子は、本門佛立宗の信徒になられたみなさんに、信心をおぼえて日々実行していただく信心の常識をわかりやすく解説したものです。教化親（導き親）といっしょに読んでいただきたいのです。そして疑問の点はお尋ねください。

ご家族にも読んで聞かせて、家族中で理解するようにしてください。大事なことは、書いてあるとおり、すなおに実行することです。お寺やお講に参詣して、信心修行の姿を目でたしかめ、御法門（みおしえ）をよく学んでください。

それがなにより、あなたにとってしあわせの種蒔きになるからです。あなたのご精進を期待いたします。

入信を随喜して一言

あなたは今回　　さんを紹介者（教化親）として、当本門佛立宗に入信されました。そこで、当佛立宗の信心の心得や修行の仕方などの大略をお話して、そのよき理解者となり、信心を続けて、喜びの中に毎日を送っていただきたいのです。

あなたの所属するお寺は　　寺といい、その信者の組織は　　教区（連合）の　　組（部）で、お世話をする役中は　　氏です。どうか一日も早く、その組織に所属する信者達と親しくなって、わからないことなどは気楽に聞いていただきたいのです。

参考に初信の心得を二、三列記してみます。

1. **奉安した御本尊にご祈願する方法をおぼえること。**
2. **組（部）の世話係（役中）と親しくなること。**
3. **お寺へ参詣する大事さを覚えること。**
4. **世話係の信者が来訪したら、都合のつく限り喜んで招き入れ、信者のお話を聞くこと。**

5 信者間の金銭の貸借は厳禁されています。

なお、当宗の歴史など二、三書き添えておきます。

日蓮聖人の教えから約百年後、諸派に分かれた日蓮門下の中で、もとの正しい教えにもどされたのが、門祖日隆聖人であり、その後幕末期にふたゝび乱れを正され今日の佛立宗の原形たる本門佛立講を開講なされたのが、佛立開導日扇聖人（長松清風）です。

このお三方を尊称して三祖と申し上げるのです。（高祖・門祖・開導）

そして、太平洋戦争後、宗教法人として独立し本門佛立宗と称しているのです。

当宗は、一本山制で、京都北野にある「宥清寺」を本山とし、全国に約三百カ寺を擁しています。外国では「ブラジル」「韓国」の数カ所に寺院があり、他にハワイ・台湾・米国本土・オーストラリア・ヨーロッパ・スリランカ等にもご信者が増えつゝあります。

日蓮聖人の教えをいただくのですから、南無妙法蓮華経の御本尊を奉安しお題目を唱える信心ですが、**「本門八品所顕、上行所伝本因下種」**という言葉をお題目に冠して唱え、他の日蓮宗との相違を示しています。

1 お給仕

日蓮聖人の宗団には、古くから「給仕第一」「信心第二」「学問第三」という鉄則があります。普通は学問、信心、給仕という順序で、物事を上達させるのですが、私どもの信仰は、お給仕という実践で信心を把握せよというのです。

御宝前にお給仕するという場合は、まず、御本尊を生きている仏と信じ敬って、お仕えをします。御本尊は私どものすることを、何ごとも見通しておいでだと信じて、陰日向なく、お喜びがいただけるようにお仕えをする。何をお喜びくださるかといえば、自分の信心を正しくすると共に、他人にもすすめて、自他共にご利益がいただけるように信心することで、その御本尊が喜ばれることなら、労苦を厭わずお仕えするのがお給仕の精神です。それで信者は、御宝前を清め、ほこりを払ったり、周囲を整頓したりします。また、おそなえものをするお給仕としては、お花をあげたりお初水（お供水）を供えたり、お菓子や果物を供えます。勤行の時はおあかりをともしたり、お線香をあげたりして、御宝前の尊さが増すようにつとめます。

ふきんやハタキは何種類かに分けて（たとえば上・下のように）お清めすれば、なお志深いもの

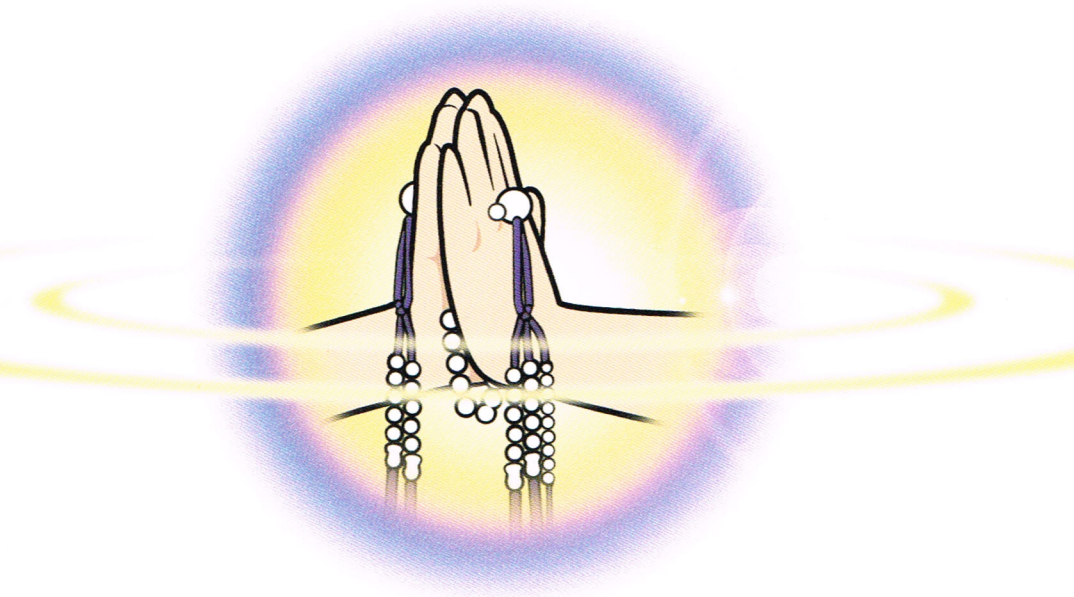
となります。

お寺の御宝前のお給仕中、お掃除などは僧侶（教務）の役目ですが、住職が一人しかいないお寺などは、家族や信者が当番制で清掃などのお給仕をしています。どのお寺でも御宝前の水屋があって、お給仕に失礼のないようにつとめております。朝夕のおつとめもご法味（お題目）をお供えするお給仕として大切ですが、ここでは御宝前のお給仕の重要性とお給仕の仕方、清掃などを並べてみました。要するにお給仕が信心上大切だと銘記してください。

2 回向

回向という字は、自分で積んだ功徳を他に回らし、その方々もご利益がいただけるよう仕向けることですから、向ける相手は死者ばかりでなく、生きている人達にも及ぼすようにとの意味もありますので、社会福祉、人類平和の祈りもこもっています。

この世界は持ちつ持たれつの相互依存で一人で生きていく人間はいません。陰に陽に人のおかげをこうむることで生きていけるのです。信者は、その大勢の人達からの支持力を恩（おかげ）と受けとめて、報恩感謝することが、日々の信者の生活の心だと教えられ



ています。

妙講一座に**「願わくは受持口唱し奉る本地本法の功力を以って法界群霊離苦得益佛果菩提」**とあります。意味は、私が本門の大法を持って、口唱信行させていただいておりますが、どうかその功徳力で、一切の諸精霊に追善が出来て、成仏の果報をいただけますよう、苦を法楽の果報に転向するようにと、ご祈願するご回向の言上文です。私どもは祈願を成就していただくため、口唱信行に励むわけですが、そのご祈願の中に死者追善の回向のご祈願もあるわけで、佛立信者にとっては先祖の回向が大事だと心得てください。

個人的な力は微力でも妙法力が加われば、あらゆる世界の群霊にも救いの手がさしのべられるので追善回向を忘れず、御宝前でのおつとめには先祖の回向を欠かさず、言上するのです。さらに忌日に、お寺へ参って、ご回向をしていただいたり、塔婆をあげたり、またお墓参りするのも、妙法経力がいただける佛立信者の大事なつとめ、と教えられています。

信者はこの心あたたまる、ゆかしい回向の心をのばし、お看経のたびごとに、他の人のために祈る口唱とともに死者の回向を怠ってはなりません。

3 口唱

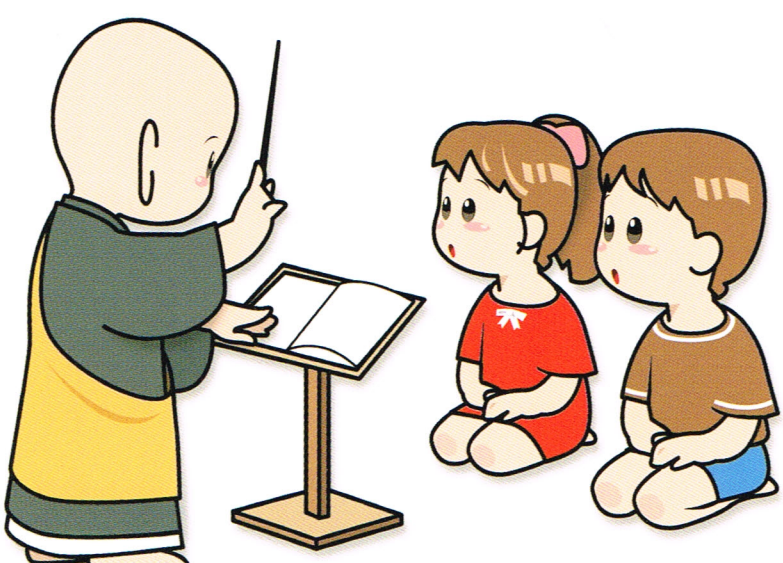
口唱と申しますのは、口で南無妙法蓮華経と唱える修行のことです。この口唱行を当宗の信心では重要な行とし、日夜のおつとめは口唱行が中心となります。だいたい、仏法の修行は、身・口・意の三つを通して行います。その中でお題目の修行の場合はいろいろの理由があって口唱行を優先するのです。また身・口・意の三業にも自分の為の修行（自行）と人の為に役立つ修行（化他行）があって、お題目の修行で申せば、自行のときは口で唱え、身では合掌の姿と申しますから、最も行儀のよい姿で口唱し、心は御本尊を生身の仏とお敬い申して唱えます。

化他行の場合は他の人の幸せを願ってお唱えするとともに口でお題目の功徳を分相応の力で説いて聞かせ、信心をすす

めます。身は妙法を弘めるために骨惜しみなく活動します。心は他の支えになって、ご利益がいただけるよう慈悲心をたぎらせます。妙法の修行は以上のように、自行と化他で行じますが、口唱行を中心とします。凡夫のする修行ですから、心に迷いが生じたり、怠りが出てなまけたりするときがありますが、形式的でも口唱を続けることが大事で、口唱さえ続けられれば、信心前が後退しても取り返すことができます。最初から理解ができて信心の出来る人はありません。その未熟時代でも、口唱をすればご利益があります。**「小児乳をふくむにその味いを知らざれども、自然にその身を養う」**との教えもあって、小児に相当する信心のわからない者こそ口唱行が必要です。また多少信心がわかって来ますと口唱より理屈に走りたがるときがあり、**「生ものじりは口唱嫌がる」**といましめられておりますが、その時も無理矢理にでも口唱を怠ってはならないのです。ですからそういう心理的な難関を克服して、動揺せず、喜んで唱え重ねる口唱が出来るようになれば、信心は及第です。

それから唱え方ですが、「ナムミョウホウレンゲキョウ」と明瞭に唱えてください。

「ミョウホウ」または「ホウ」というところに力を入れて唱えると、ハッキリ唱えられます。口唱の声が他の人の耳に聞こえて信心を起さす化他行にもなりますから、何だかわからぬような唱え方は禁物です。それに声の大小、唱え重ねの多少、速度の遅速も考えていただかねばなりません。お寺などで唱えるときは大声で結構ですが、家庭では中声がよろしいでしょうし、唱える時間によっても心配りが必要です。それから口唱時間の長い短いも、人により時によって違いますが、朝夕のおつとめは千遍（朝夕十五分間一日三十分）ぐらいを標準にしてください。速度も早からずおそからずで、他人が聞い

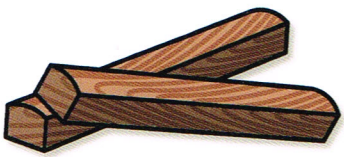


てお題目を唱えているなとわかるようハッキリ唱えてください。拍子木を打って口唱ができるようになれば、一層速度や高低を考えていただかねばならないでしょう。他の人といっしょに唱えるときは速度を揃えることが大事で、他の声を聞きながら、調子を合わせてほしいのです。

私どもの唱えるお題目は、万法具足と申しまして、宇宙法界に存在するすべての力、働きを蔵しています。その不思議自在のご利益を引出す行が口唱行ですから、開導聖人は御教歌に

となふれば千々のねがひもかなふなり　みのりのこゑぞたからなりける

と仰せられ、口唱行こそご利益をいただく万能の道と仰せられたのです。したがって口唱行のときのご祈願が大事で、私どもの運命を好転させるような、功徳の深いご祈願を選び、そのご祈願に力を入れることが大切です。

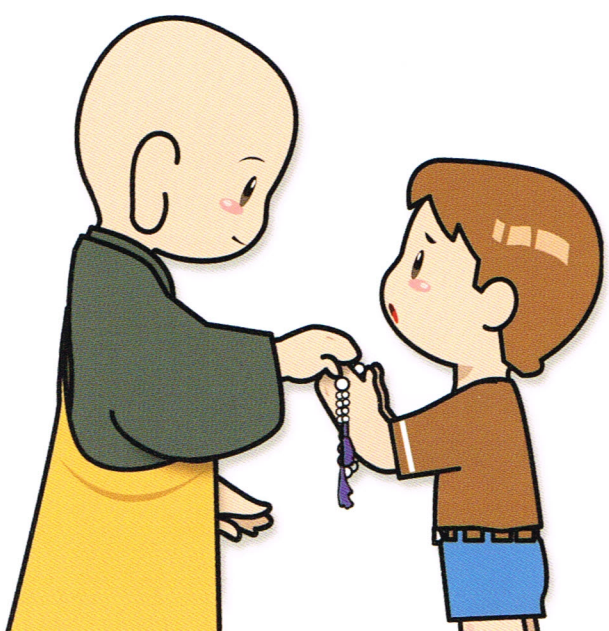


4 懺悔

ご利益を頂く方法に「懺悔」があります。悪い結果が出て苦しめられているのには必ず原因があります。その原因を発見したり、それを、教務や先輩役中に指摘していただいたりしてその悪い点を「懺悔改良」すればその罪ほろぼしの第一歩になります。

「大罪なれども、懺悔すれば、その罪消ゆ、小罪なれども懺悔せざれば、その罪消えず」

と仰せられてありますから、懺悔心を土台に置いて信心をみがくのです。その懺悔とは、罪に対して深く悪かったと悔い、再び繰り返しませんと誓う心です。そして、御本尊さまにお詫び申しあげてお許しを乞い、教務にも申しあげ、信者にも発表して、再びしないという誓いをするのです。気まりが悪いと、自分の心の中でお詫びをして、



それでよしとするのは本当の懺悔とは申せません。

では、信心上の悪い種蒔きとは何かといいますと、法華経の教えに背くことで、それを謗法と申します。不敬とか懈怠とか不養生などを信心の邪魔として謗法の部に入れますが、これはたいがい現在の話で、信心では過去世の振舞を宿業とか、過去世の因縁とか申して反省しますから、懺悔も現在の懺悔だけでなく過去世の懺悔もあります。ただし、過去世の悪行は実感がありませんので、ついつい無視しがちになりますが、よく教えを聞いて、過去世の懺悔も大切と心掛けなければなりません。

実際には私どもの修行の裏側に懺悔の心がこもっています。例えば、口唱の行を日々積み重ねるのは過去世に口唱を嫌った謗法の懺悔で、その罪ほろぼしをやっているのです。戒名を過去帳に記入するのも、回向心の不足だったことの懺悔が裏側にあるのです。当宗の信心はこのように懺悔の行が何事にもこもっていることを心得てください。根本から立て直しをはかって、現在も未来もご利益感得の道を進む信心ですから、改良を教えられたら素直に懺悔改良をするのです。我を張って反抗心をつのらせるのは愚の至りと悟ってください。

5 謗法

謗法という言葉は、信者同志でも盛んに使用する言葉で、親殺し、主殺し、佛をきずつけるなどの大罪よりも、もっと重い罪といわれています。当宗では謗法の法の字は法華経のこと、謗は背く、そしるということで、正法護持の反対です。法華経は人間を成仏せしめる大法で、その一大事の良縁を得て、人間は過去・現在・未来の三世一貫のご利益をいただくことができるのです。その成仏の種となる妙法に背くのですから、謗法罪ほど恐ろしいものはない、それで当宗は謗法厳禁をやかましく教えるのです。

謗法をはらはな利生あらはれず
雲がはれねば月もおがめず

という御教歌もあります。

朝夕、御本尊に向かってお看経をするとき、まず「無始已来謗法罪障消滅……」と言上するでしょう。それは数えきれない過去世から謗法罪を犯して来たに違いない、どうか、その重罪をお許しくださいと、懺悔して再び謗法は犯さないぞとお誓いして口唱の行にはいるのです。

では、現在における具体的な謗法行為は何かと申しますと、まず南無妙法蓮華経の御本尊にかかわるものです。妙法の御本尊に対しては、他宗の本尊類や守札などは比較にならぬ劣ったものです。

それなのに勝れた妙法の御本尊を不足と思い、劣った本尊類をまつるのは、本末転倒というべきで、そのあやまりに対し謗法払いをするのです。また、信仰的に他の神社仏閣に参って祈願するなども謗法として戒めます。

お題目ばかりではちとあやふしと そへ物に外たのむ謗法

と心得て下さい。

日頃の修行では、お題目の口唱一筋にすべきところを、外の経文などで口唱にかえようとするのも謗法として折伏します。

御利益のいたゞけぬみち四ついかに うたがひ・まよひ・ほこる・をこたる

などの謗法もあります。この謗法の雲が邪魔をしていては、ご利益という月はおがめないのですから、この謗法退治に宗門人は全力を挙げるのです。

6 祈願

祈願とは、祈りとも申します。祈は声を出して祈ること、願は心の中でお願いすることで、祈願には神仏などのお願い申す相手があります。その対象になる神仏に願いを叶える力がなければ、祈願しても詮ないことです。だいたい、氏神や神社などは、祭神はあっても、願いを叶えると約束をしてくれてはおりません。エライ人だから昔からの風習で神社に祭ることはあっても、ご守護くださる力もないし、約束もないのですから、当宗ではそういう神さまにご祈願はいたしません。祈っても、闇に鉄砲、ノレンに腕押しで無駄なことです。仏法を信ずるにしても、仏法の中にはいろいろお経があって、力のあるのも無いのもありますから、どのお経に依るべきかということがあって、それを仏さまが分別し、法華経こそ、祈願を成就する御経なりとご指摘くだされたので、宇宙法界の万法の功徳力を具えた久遠の本仏の全功徳を包み蔵する上行所伝の妙法蓮華経を御本尊として、ご祈願をかけるのです。南無妙法蓮華経の御本尊に信心を捧げれば、経力及び諸仏菩薩諸天善神の守護の力によって現世安穏、後生善処のご利益がいただけるのです。

そこで、当宗のご祈願の方法とか、その精神とかをお伝えしましょう。祈願の方法には謗法の穢れなく、御本尊に向かって口唱に励むのです。もう少し詳しく申しますと、妙講一座の要文にあるご祈願文を言上し、各自のお願いを言上し、お題目を一心にお唱えするのです。

恋したひ唱へかさねしこゝろより　法の光りの顕れにけり

とあって、恋慕の情、即ち疑わず迷わず、信用し切っておすがりすることが大切で、それが祈願の心です。また、

唱ふるが信心なればとなへずに　ありがたがるは信心でなし

との御教歌もあって、まず口唱行に力を入れることが大事です。要するに信心と口唱が車の両輪のような関係にありますから、その両方に気を配って改良を怠ってはならないのです。

祈願して成ずる物と捨おかば　権兵衛が種まき烏ほぜくる

とも御教歌にあって、祈願達成まで修行の上にも、心構えにも邪魔ものが出て、駄目にされることがありますから、警戒を怠ってはならないのです。また、

かはるなりおなじみのりをいのれども　願ふこゝろのふかさあさゝに

とありますように、心の中の願う度合の改良も大事です。自分のことばかりお願いしないで、仏さまにお喜びいただくようなお願いをさせていただかねば申しわけないと、反省改良を願う心も加えなければなりません。私どもは末法の凡夫ですから、自分だけの力ではなかなかよい方向には進まないものです。信心の友を選んで、祈願の仕方、精神の改良を促していただくことが必要です。

7 御法門

当宗のお寺やお講席では必ず御法門が説かれます。ご回向の集まりにも御法門をする場合がありますが、それはなぜか、御法門によって当宗の信心の正しい修行方法を知ってもらいたいからです。法門という言葉は、法とは仏法、門とは入口ということで、み仏の功徳、ご利益の世界（寂光）に入れていただく入口、すなわちご利益のいただける教えということです。

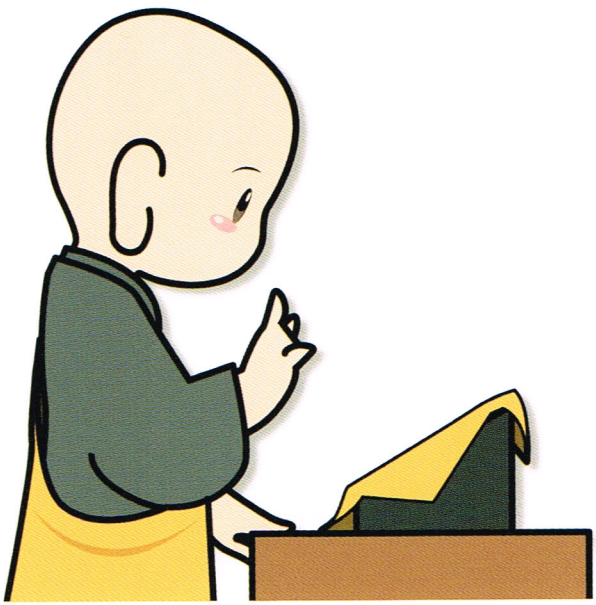
門にも一の鳥居、二の鳥居、本殿直通の大門とか山門があるように、仏法にも権門、迹門があって、その上に本仏の世界に直通する本門の御法門があります。当宗の御法門はこの本門の御法門で、末法におけるご利益に直通する道を説かれた本門八品所顕の南無妙法蓮華経の信心を中心とした御法門です。当宗では、その本門八品の教えをわかりやすく説くために、佛立開導日扇聖人の御教歌を解説する形式で説きますから、その御教歌や御法門中に引かれる日扇聖人のお言葉などは覚えていただいて、その実践に心掛けてほしいのです。その間に私の考えを交えると脱線する心配がありますから、即聞即行と申して、聞いた御法門はそのまま実行に移す稽古が大事で、実践してみるとわからないことも実際に出て来ますから、それを更によく御法門を聞いて、納得が行くようにつとめ、たとえわからないことが部分的にあってもそのために尻込みしないよう心掛け随従（ついて行く）することが大事です。

聞いた通りするが信心我が思ふ様にするのは信心でなし

です。世間の中には、納得がゆかなければできないと申す人がいますが、本仏の大智恵を全部わかろうとすることは無理で先師はわからすのに随分苦心されていますが、それでも解り難い部分がありますから、当宗では現証のご利益でご信心を起す道を正面に押出して、有難いなァとわからせてその補助役を御法門でして自他安穏のご利益の道に進ませようとしているのです。

現証の利益で信を起させて未来を救ふ祖師の御本意

という当宗の信心の進め方を忘れないでください。



8 お寺参詣

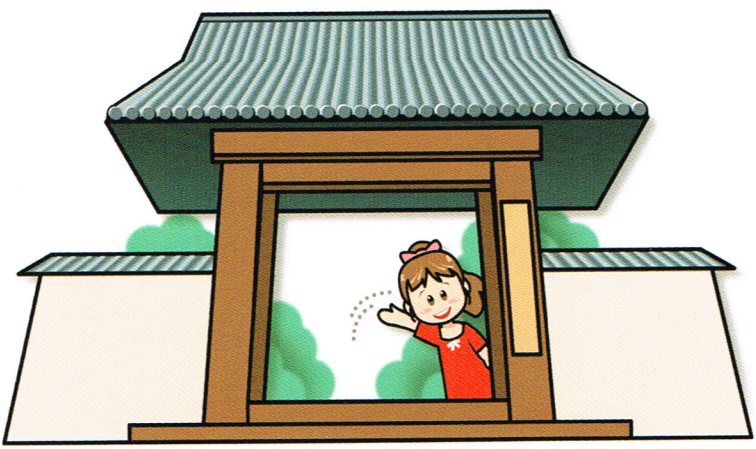
当宗の信心修行の一つにお寺参詣があります。朝の勤行に参る朝参詣、先師の御命日総講に参る総講参詣、その他特別の御祈願があって個人で参ったり、役中等がまとまって参る総参詣など、いろいろの場合があります。お寺は信心をみがく道場で、信者は現当二世のご利益をいただく種蒔きの修行をし、またそれを教えるところですから、御宝前に恭敬礼拝し、恋慕、渇仰の心で口唱の行につとめ、ご供養を捧げるため、お花料やお燈明料を奉納し、お寺が美しく維持されるためにお賽銭もあげ、またご弘通の資金にもさせていただくのです。そして参詣者が気持ちよく参詣ができるようにと、特志者のご奉公で、内外の清掃などもしております。したがってお寺の中で行われているいろいろの動きの一つ一つをよく観察すれば、みなことごとく信心修行に役立つものばかりです。ですから、参詣者は自分の当面のお願いのみでなく、一心に道を求めることをさせていただかねば参詣の甲斐がありません。お賽銭でも、その深い功徳を考えて、厚いこころざしで奉納したいものです。またお寺では、必ずといってよいほど信者が集合のときは御法門が説かれますから、よく聞いて信心の改良の役に立てていただきたいし、ご披露のビラなどあれば、よく読んで率先してその行事などに参加してほしいのです。

人によっては、自分の住居にも御本尊が奉安してありますから、それを拝めばお寺へ参詣しなくてもよいのではないかと考えている人があります。確かにその通りと、うなずける面もありますが、

お寺と自宅とは親子の関係ですから、少徳に執着して大徳を忘れては忘恩の徒となり、功徳の道を見失う危険があります。お寺は公的で信心専門の聖場、自宅は個人的で、下手をすると信心の邪魔をするボンノウが充満しているところ、油断をすると信心が下積みになって、功徳の光が消えてしまいます。それに我侭がこうじて信心が優先しなくなり、ご利益を蒙る度合が薄くなります。とにかく家庭は大部分凡夫の欲を楽しむところですから、御本尊を奉安していても、なかなか信心第一になれません。それで、お寺へ参ってその家庭の欠点を補修しようというのです。欲望の支配から一時なりとも離れてお寺参詣をすることが、善因になる信心修行となるのです。

信心のあるとなしとは参詣を
するとせんとに顕れにけり

と教えていただくのですから一回でも多くお寺参詣するように心がけましょう。



9 お講

お講はお講席のことです。信者の宅を集合所にし、お講願主が主催者で、関係者にお参りしていただき、お講師を導師に招き、御法門を説いていただくのです。お寺のお総講が信者宅に移動したようなもの、昔は願主が一人でしたが、このごろは添講といって、多くの願主が加わり共同してつとめるようにかわって来ました。毎月一回つとめる慣習があり、願主希望者はふえるので添講式でつとまるお講が多くなり、お講席をいただけない信者でも願主になれるようになりました。

願主は、お講師に御法門を説いていただいて教導の功徳をいただき、布施供養してお講師のご奉公の応援をし、沢山の信者に参詣していただいてその方がたの信心増進を計り、参詣者も御法門や参詣者の体験談等を聞き、他にも伝えて共に信心改良をします。お世話をする役中は、お講という功徳行を円滑に進めるのでこれまた大きな功徳です。お講が真面目に盛んにつとまれば、個人個人で積む功徳よりも、大勢で一丸となって積む功徳ですから莫大な功徳になります。

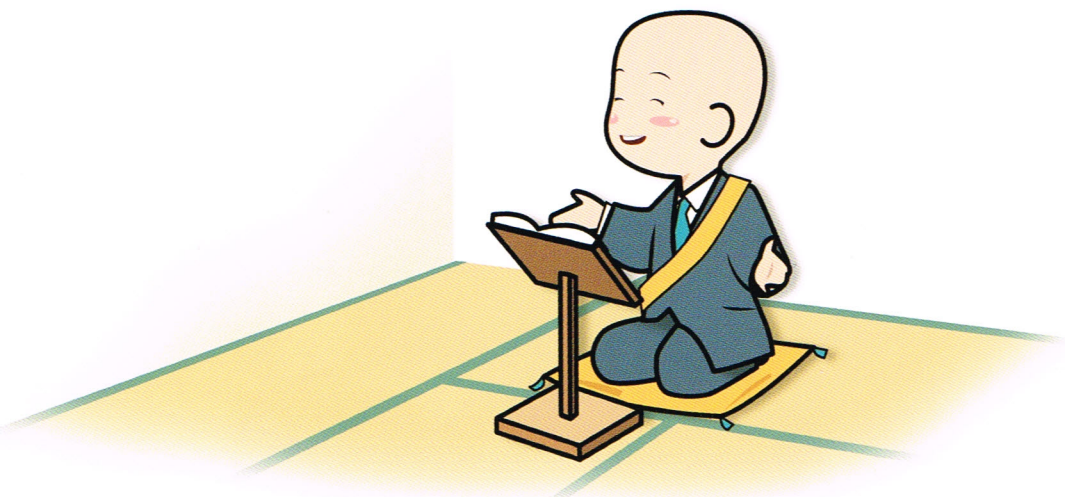
願主もよし、お講師もよし、参詣者も受け方次第でこれもよし、お役中はご奉公甲斐がありますから、ますますお講の内容を充実させたいものです。

それからお講では、必ず先祖のご回向をつとめ、宗門全体のご祈願や、個人個人のご祈願もします。月々のお寺の行事や、部内のご奉公予定などのご披露もあって、信者は「よく聞く」ことに

心掛ければ、得るところは極めて大きいものがあります。それにお講のたびごとに信者は顔を合せますから親近感が強まり、持ちつ、持たれつの体制が強められ、そのおかげも大きいものです。お講の前にご近所に挨拶をしておくとか、参詣者も、お講のつとめ方も品格がよければ、近所の好感が得られ、宗門の理解者がふえるでしょう。お講はここかしこで盛んにつとめ、移動式信心学校の役目を果し、お講付も毎日一回は読んで信者の義務を果してください。

またお講には、御導師（住職）のお講を甲お講、責任講師（所属教務）のお講を乙お講といったり、婦人会お講、青年会お講、祥月お講などの名称のあることも付記しておきます。当宗はこのお講という家庭布教が大きな力であることを銘記してください。

お講には参れば参る参らねば
そんといふことしらぬ罪障



10 ご有志

当宗では、浄財奉納のことを「ご有志」と申します。浄財は布教や社会事業などに寄附する金銭、利得や報酬を考えないで寄贈する金銭のことです。奉納はつつしんで神仏やお寺などに物品を供えたり、さしあげたりすることです。ご有志の志という字は、謝意や好意をあらわすために贈ったり、奉納したりする金品、故人の追善供養のための金品、喜捨、布施の意味ですから、当宗では浄財奉納を「ご有志」という慣習になっています。

元来、仏道の修行は「まごころ」をどういうやり方で表わすかということで、一つは骨身を惜しまずという、身体の労苦をいとわないという方法と、財を惜しまないという方法があります。ご有志という場合は、金品を惜しまず奉納して、お寺のためになり、弘通のお役にたとうという奉仕の仕方なのです。申すまでもないことですが、お寺を

維持運営して、お寺の機能（はたらき）を平常でも存分に発揮しようとすると、御宝前費、営繕費、光熱費、食費、人件費などがなくてはどうにもなりません。それをご有志奉納で充当するのですから、お寺を護るためにはご有志金の力は偉大で、功徳行としては高く評価されます。しかし、金銭というものは、集め方にも使い方にも、いろいろの問題が伏在しますから、当宗では、寺内と教区に財務担当の役中が沢山いて、あやまりのないよう万全を期しております。

また、ご有志の種目もかなりあります。本山に対するお初燈明料等のご有志、自分の所属するお寺には、義納金、建営ご有志、記念ご有志等々があります。どれも、妙法弘通に結ばれる功徳行と考え、浄財奉納の心で邪念を捨て、喜びをもってご有志しなければなりません。貧女の一燈ということもありますから、ご有志はまじめな気持ちでご奉公しましょう。信者の中には普段の積立てがよいと、日々の売上げ金の一部を、サラリーマンは月給の一部をお初として積立てている人もおります。いつも喜んで浄財を奉納させていただくには、常々の積立ても賢明な方法です。また信者同志の金品の貸借は、信心に悪影響を及ぼしますので、貸借厳禁の申合せがあります。必ず守ってください。経済上のご利益感得は、信心増進に大きく役にたちますから、ご有志に関しては信心からはずれないよう、よい種時きをしてください。

本門佛立宗　宗務本庁　弘通局